『幸せな結末』

ひじり在宅クリニック　院長　岡本 拓也

初めて会った時の君は医療不信のカタマリのようだったね。君の夫からは、「信頼できる医療者に出会ってこなかったから…」と聞かされたよ。布団にぐったり横たわり、「痛くて眠ることもできない。でも痛み止めは使いたくない」と苦痛に歪んだ顔で君はきっぱり宣言したね。その日は在宅酸素を入れさせてもらうのがやっとだったけど、それだけでも「少し楽になった」と喜んでくれたね。その後、電動ベッドを入れさせてもらい、すんなりとではないけど少しずつ薬も使ってもらえるようになりました。先生に全部お任せします、と言ってくれるまでには少し時間がかかったね。まあ、全て任せてくれる必要はないんだけど、うまくない選択をした結果辛い思いをするのは君自身だったからね。

それにしても君は実に肝っ玉の据わった人でした。君の口から刺身ほどのかなり大きな血まみれの物体が咳とともに飛び出してきたことが6回もあったのに、不安なそぶりも見せず、「こんなのが口から出てきたの」と、写真に撮った肉片を見せてくれたよね。腫瘍の壊死組織であることは一目瞭然で、君はそれを「癌が死んでいる」とプラスに受け止めていた。受け止めようとしていただけなのかもしれないけどね。

ある時、君は鬼気迫る本気の表情でこう言ったね。「私は全然死ぬつもりなんかないの。子供たちが大きくなるまでずーっと生きて、孫の顔も見るの！」震える声の君は半分泣いていたけど、君の強い意志を感じました。僕自身も心底そうであればいいと思ったから、君のその思いはしっかり受け止めました。

君が大瀧詠一の『幸せな結末』という歌を好きだと訪問看護師から聞いたのは、水曜午前の外来が始まる直前のことでした。その日の午後は君の家を訪問する予定だったけど、知らない歌だったので、外来の合間に聴いて必死に覚え、弾き語りできるよう昼に練習して君の家に向かいました。でも、君の状態はそれどころじゃなかった。せっかく覚えたけど、正直もう君の前で演奏する機会はないと思った。でも、結果的には4日後の日曜日、やはり訪問看護師からの依頼で急遽君の家を訪れることになり、そこで弾き語りミニコンサートをしたね。子供たち以外の君の家族は皆泣いていたけど、君は本当に気持ち良さそうな表情で嬉しそうに聴いてくれて、「先生、すごく良かった！嬉しい！ずーっと聴いてたいなぁ…」と言ってくれたね。

その僅か2日半ほど後、水曜日になったばかりの深夜、僕の携帯が鳴り、まだ君が居る君の家に僕は向かった。横たわる君の足元に座る夫とK君。K君は「マミー、マミー」と言いながらすすり泣いていたね。ミニコンサート後に撮った写真に目をやり、「マミー、可愛い…」とつぶやくK君。「そうだね。マミーすごく可愛いね」と僕。「この壁、マミーと一緒に塗ったんだよ」と教えてくれるK君。「そうだね、マミーの部屋の壁、マミーと一緒に塗ったよね」と夫。「マミーの色がさっきよりうすくなってきた」と小さな声で叫ぶK君。その後、居間に移って死亡診断書を書き始めた僕の側に寄ってきて、「これマミーが作ったんだよ」と、編み物など君が作った色々なものを運んできてくれるK君。「他に何かないかなあ…」と切迫した様子でマミーが作ったものを探し続けるK君…まるでそれを探している間は大好きなマミーと繋がっていられると思っているかのように。起こしに行った幼い弟を結局起こすことができず、「起きなかった…」と諦めて戻ってきたK君は、死亡届の「亡」の字を指して、「この字、知ってる。学校で習った。ボウ」と教えてくれたりもした。K君の相手をしながら大分書き進んだ診断書をじっと見つめていたK君は、「何を書いているのかさっぱりわからないや…」とつぶやいたりもしてた。とにかくK君は一生懸命に何かをしようとしてくれていた。おそらくは、マミーのために。

診断書を書き終わり、夫とK君と君の両親と一緒にテーブルを囲んでいだ時に、夫が君との最後の場面を教えてくれました。「僕と両親が見守る中、逝きました。最後の力を振り絞って僕の手をぎゅっと握ってくれて、涙をぽろっと一筋こぼして、息が止まりました。こんな幸せな終わりはないです。これ以上の終わり方はないです。」　君も頑張ったけど、夫もよく頑張ったよね。ミニコンサートの後に撮った写真を夫の実家の家族に送ったら、「久しぶりに笑っている顔を見たよ」と家族が喜んでくれたと、君の夫が教えてくれました。夫もK君もまだ小さいS君も、君に会いたいだろうね。君に触れたいだろうね。もう少し長く生きてほしかったけど、40年に満たない短い人生を君は立派に生き切りました。孫の顔を見るのは少し離れた場所からになってしまうけれど、しっかり者の君のことだから必ずや見届けてくれるよね。